

---

# つみびと (prototype)

日野成美

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

つみびと (prototype)

### 【Nコード】

N9466L

### 【作者名】

日野成美

### 【あらすじ】

私はそれを見逃さなかった。教会の献金籠からだれかが、おさつを一枚すりとったのだ。

教会でのミサという神聖な場で起こった盗みを見てしまった「私」。

盗みを働いた『つみびと』は、自分のした行為を悔いるのか？

「私」はミサのあと、盗みがあったことを神父に告げる。返ってきた答えは、意外なものだった？？。

人はみな十字架を背負っている。原稿用紙11枚の実験短編。

## （前書き）

註・この小説は、盗みを推奨するものではありません。  
聖書にも、「盗むなかれ」と本来、書いてあります。

ただ、世界の何処かで、今も、やむにやまれぬ理由で、盗みを働くひとがいる。

覚えたる罪と、覚えざる罪と。

そのことを念頭において、この小説を読んで頂ければ、幸いです。

筆者日野成美 拝

つみびと 日野成美 著

ヨハネによる福音（ヨハネ八・一 - 十一）

そこへ、律法学者たちやファリサイ派の人々が、姦通の現場で捕らえられた女を連れて来て、真ん中に立たせ、イエスに言った。

「先生、この女は姦通をしているときに捕まりました。こういう女は石で打ち殺せと、モーセは律法の中で命じています。ところで、あなたはどうか考えになりますか。」イエスを試して、訴える口実を得るために、こう言ったのである。イエスはかがみ込み、指で地面に何か書き始められた。しかし、彼らがしつこく問い続けるので、イエスは身を起こして言われた。

「あなたたちの中で罪を犯したことのない者が、まず、この女に石を投げなさい。」……

…

私はそれを見逃さなかった。教会の献金籠からだれかが、おさつを一枚すりとつたのだ。

四旬節（註：キリストの受難を思つて過ごす期間。このあとに教会最大の祭り、復活祭が来る）の混み合ったミサだった。献金の籠はいつもミサ中の奉納のときに、小銭やおさつをそっと入れられて、前の席から後ろへ後ろへ、人々の手から手へ渡される。信者たちはカバンや財布からお金を取り出すのに忙しい。

だから私が盗みの現場を見つけられたのは、まったく偶然と言つてよかった。私はその盗人の手を目線に捉えていた。ふるえる手は折れ曲がった千円札を、くしゃりと婦人用力バンにねじこんだ。私

はその手の主を見つめる。

御堂の四列目に私は座っていたが、金を盗んだ手の主??盗人は三列目の、私の左斜め前に座っていた。白いレースのヴェールをかぶった、女性だった。面差しは見えなかったが、老いているのはその手の筋張ったので分かる。親指と人差し指の間の筋が、水が溜まるのではないかというほど窪んでいた。

聖歌隊の拝領唱を歌う歌声が響く。

ごらんよ 空の鳥

野の白百合を

蒔きもせず 紡ぎもせずに

安らかに生きる……

背中を見る限り、盗人は普通の人間だった。普通の女性だった。モスグリーンのジャケットに、ちくはぐで派手な花柄のブラウス。黒いスカート。ヴェールからのぞく髪は白髪が多いように見える。

私は盗人のことをじっと見ていた。どうすべきか、考えあぐねてしまったからである。

すると不意に、女性が振り返った。私が彼女を見つめすぎていたのだ。気付かれた。

??ばかり、と、目と目が合った。私の目に、盗人の顔の印象が焼き付いた。

顔色のはつとするほどくすんだ、染みの浮いた皮膚のたるんだ女性である。歳の頃は、わからない。というのは、白髪や皺の多さ、そしてそのよんだ光の浮かぶ疲れた瞳から、おおかたの誰もがきつと実年齢よりも老けた見方をしてしまうだろう、そういう人相だったから。四十と言われても、八十と言われても納得してしまうだろう。

気圧されたように見つめ合う一瞬のあと、盗人は顔をそむけた。  
??盗むなかれ。

私ははつと視線を十字架上の主に振り上げて、本当にどうしようかわからなくなってしまった。この女性に憐れみを覚えたのだ。神様！

もしここがコンビニや本屋だったら、「万引き!」「泥棒!」の声をあげればすむことだろう。でもここは教会で、それも神聖な典礼??ミサの最中なのだ。

私は聖体拝領のときを待った。司祭からご聖体のホスチア（パン）を受けるのは、信者にとって、秘跡と呼ばれる特別な一瞬のひとつだ。何か動きを見せるかもしれない。

聖体拝領だ。多くの信者と一緒に、盗人は平然と前へ進み出た。私は待った。そして時が来た。

順番が来て、盗人は司祭に向かって差し出した手を引つ込めて、静かに頭を垂れた。その頭が震えていた。聖体を手に取りかけていた司祭は、何か呟いて、彼女の頭に十字を切った。盗人は席に戻り、ずっとうつぶいたままだった。

盗人の起こしたその行動が腑に落ちないまま、私は列に並んで、いつものように聖体を受けた。それは子供の頃から聞かされてきた「神様の味」というより、紙っぽい、そしてほろ苦い罪の味がした。（なぜ、盗んだ?）

盗人の背中は普通の人間のように見える。けれどもその顔は、どうだろう。人相は、どうだろう。罪人だ。このひとは、罪人の顔をしている。

席に戻って、ひざまづき、私は祈った。祈っても祈っても答えは見いだせず、ふいに天啓の鳩のように降ってわいたのは、聖書にある十戒の一つ。

??偽証するなかれ。

そうだ。

答えは最初からひとつしかなかったのだ。

問題は、それをいつ実行するかだ。

私はミサが終わるのを待った。罪人の女性は身をここめるように

してうつむいたままだった。

閉祭の挨拶のあと、しばらくは沈黙が続いていたが、やがてがやがと人々はざわめきだした。儀式は終わったのである。

聖歌集を片付ける音や、外でお茶やクッキーの振る舞われる賑々しい声が充ち始めた。

私は目を閉じて祈っていた。盗人の女性も祈っていた。

女性の気配が立ち去った頃あいを見計らって目を上げると、もう教会はしんとしずまりかえっていた。信者たちがあとに残した、祈りの気配が充ちていた。私は立ち上がった。

御堂の入り口で聖水を指につけて胸に十字を切り、キリストの十字架をあとにすると、私は神父様を捜す。

神父様は事務室にいた。献金を数えて金庫に仕舞うところだった。神父様は若いアジア系の外国人で、日本語に堪能だった。まだ白い法衣に身を包んだままで、その褐色の肌と衣の白が対照的に、蛍光灯の灯りに光る。四旬節を示す紫の肩掛けは、もうつけていない。「神父様」

「おお、こんにちは。どうしましたか？」

「今、大丈夫ですか」

喉に、言葉が引っかかって今にも嘔吐しそうだった。周りに誰もいないのを見て取ると、私は一気に言った。

「私、献金籠から、お金を盗んだ人を見ました」

私は神父様を見上げた。神父様は顔色を変えなかった。それどころか、微笑み、私に座るよう促した。事務室の冷たいパイプ椅子に、私は荷物を抱えて座った。気付くと、肩で息をしていた。

「いつですか？」

「ミサの奉納のときです」

「誰だか分かりますか」

「年配の女性でした。名前はわかりません。おさつを一枚、すり盗ったんです」

「心配ありません」

えっ、

と、言葉が漏れて、そのあとが続かない。

神父様は金庫にお金を入れて、鍵をしっかりと閉めた。それから、ひと言一言、ゆっくりとじっくりと、噛んで含み、幼子に教えるように言った。

「そのひと、今、とてもお金に困っています。家族が死んで、働き手がなくて、彼女も病気です。彼女自身も、精神に大きな十字架を背負っています」

??あの瞳のよんだ光。

私は盗人の姿を思い起こした。あのくすんだ土色の顔。

十字架を背負った罪人の顔。

「……警察とか、いいんですか？ だれかの、大事なお金なのに」  
「外なら、そうなるでしょう。でも??」

神父様は微笑した。

「ここは??教会です。集う人は、みんな、つみびとです。たとえば、ヴィクトル・ユゴーの、『レ・ミゼラブル』、あなたは読みましたか？」

私は頷いた。道德の教科書で読んだ覚えがある。

??神父は盗人に、盗人が盗んだ銀の食器の他に、あとで銀の燭台もあげていた??。

「ここは、そういうところです」

神父様は、私の肩に手を置き、

「もちろん、盗むことは、罪です。でも、どうしようもなく、罪に走る人も、います。世界中の人は、みんな十字架を背負っています」

「でも」

「納得が、いきませんか？ では、今日の朗読を思い出して見て下さい。ヨハネによる福音、八章??」

??あなたたちのなかでまず、罪を侵したことの無い者が、この女に石を投げなさい??



私は沈黙するよりなかった。

神父様は正しい。信仰の面においては、私よりもずっと正しい。

「行きなさい、主の祝福が、あなたにありますように」

「……はい」

私は立ち上がり、頭を下げ、事務室をあとにした。

雨が、降っていた。天の、涙雨。冷たい鈍色の空から、さあっと冷たい雨粒が、大地に落ちる。

泣きたい気分だった。と同時に、無性に歌いたい気分だった。大きく息をつく、雨の中で、私は歌い始めた。

「ごらんよ 空の鳥

野の 白百合を……

神父は告発者を見送って、そつと事務室から神父たちのキッチンへ続くドアを開けた。

盗人がいた。盗人はドアの陰にいて、今のやり取りをすべて聞いていた。

「わかっていたんですよ」

手にはシチューの皿を持っていて、冷めたそれを彼女は口に運ぶ。食べるに困って、神父からほどこしを受けていたのだ。

「わかっていたんです」

神父はシチューの最後のひとすくいを口に入れる女性を見つめる。女性は泣きそうな笑いを浮かべて、神父に言った。

「どうすればいいんですか、神父様、」

婦人用力バンから、くしゃくしゃの千円札を取り出して、盗人はそれを、土気色のこわばった掌にのせる。

「でも、金庫は閉めてしまいました」

おどけたように、神父は肩をすくめる。

「これを開けるのは、大変なんですよ」

「でも……」

「そのお金を、よいと思う方向に、使いなさい」

「わかりません」

「あなたは、後悔している。私の前で聖体を受けなかったのが、その証拠です」

「あのひとに見られていたからですよ。盗人と呼ばれる自分が、こわかったんです」

「そう、あなたは、つみびと、です」

つみびと、と呼ばれて、女性は動きを止めた。

「その分、よく生きて下さい。悔い改めれば、救われるんです」

「今まで何十年も神様を崇めてきたけれど、いいことなんて、なかった」

吐き捨てるように、つみびとは言つ。

「そうですか？」

「夫は死んでしまった。息子は自殺、娘は過労で働けなくなつて、私だって職がない。世の中なんで……あたしにばかり……」

息の抜けるような声が出ただけで、涙は流れなかった。彼女は人生に疲れすぎていた。

神父は歩み寄つて窓を開けて、雨降りしきる外を見た。

歌声が聞こえてきた。つみびとは自分の罪を神父に言つた人間の歌う歌を、目を瞑つて聞いていた。

…… 蒔きもせず 紡ぎもせずに

安らかに 生きる

そんな小さな 生命にでさえ

心をかける 父がいる……

…

……そしてまた、身をかがめて地面に書き続けられた。これを聞

いた者は、年長者から始まって、一人また一人と、立ち去ってしまい、イエスひとりと、真ん中にいた女が残った。イエスは身を起こして言われた。「婦人よ、あの人たちはどこにいるのか。だれもあなたを罪に定めなかったのか。」女が、「主よ、だれも。」と言うと、イエスは言われた。「わたしもあなたを罪に定めない。行きなさい。もう罪を犯してはならない。」

?? ヨハネによる福音書（2010年四旬節第5主日C年パンフレットより）

（註：カトリック典礼聖歌集より「ごらんよ 空の鳥」を引用いたしました）

《了》

## （後書き）

この作品は、盗みを推奨するものではありません。  
聖書にも、本来、「盗むなかれ」と書かれています。

この作品の原案を思いついたのは、とある春の深夜、眠れないときでした。

横になって、ライトをつけて、聖書を読んでいました。

たしか「ルカによる福音書」だったと思います。

どこを読んでいたのかは忘れたのですが、私はふと思い立って、起き上がり、デスクで一氣にこの作品の草稿を書き上げたのでした。

読んでみるとお気づきになるとと思いますが、主観一人称である「私」の描写は可能な限り省いています。これは「私」を「傍観者」として扱い、ただ単に読者がこの物語を読むときのフィルターにしてみようという、筆者としては実験的な試みでした。

しかしこれが読みにくい、人物がわかりづらい、などの弊害を生み、一応作品としては出来上がっているものの、どこか違和感を残す形となってしまいました。

また、最初期の原稿だと、もっといろんな人が出てくるのですね。他の信徒の皆さん、別の神父、そして神。

《つみびと》である女性の背景ももっと詳細に設定してあります。

そのため、現在作品を寝かせ、「神の視点・三人称」で書くべく、いろいろと構想を練っています。

筆者はクリスチャン見習い（洗礼はまだ）です。

ミサの様子など、教会に行かない一般の方々にはわからない部分が多く、そこがとつつきづらい原因にもなるかもしれません。そこも、今後の課題のひとつです。

ただ、この話は教会で展開することに意義があります。

原初キリスト教教会（新約聖書「使徒言行録」参照）は、信者が財産を持ち寄り、平等に分配する原始社会主義社会でした。

また、イエス・キリストは

「貧しきものは幸いである。天国はその人のためにある」

「（病気・障碍などの試練があるのは）本人が罪を犯したからでも、両親が罪を犯したからでもない」

と言い、貧者や病人の中へ進んで入っていきました（福音書参照）。

そして癒しました。

??それから、2000年。

「教会の中で人がものを盗む、ということは、許されることですか？」

この小説の執筆中に、神父様に尋ねたことがあります。

そうすると、神父様はこう答えました。

「人はみな、十字架を背負っています」

神にとって罪とは何か？

人にとって罪とは何か？

次回書く「つみびと」の完結編では、この命題を重視して、書いていきたいと思います。

最後になりますが、ご読了、ありがとうございました。  
みなさんの上に、主の祝福がありますように。

?? Amen +

クリスチャン見習いの、筆者日野成美 拝

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n9466l/>

---

つみびと（prototype）

2010年12月5日10時53分発行